

論文の和文要旨	
論文題目	スペイン語の総称性に関する形式意味論的研究
氏名	喜多田 敏嵩
本論文は、現代スペイン語における総称性 (genericity) に関する理論的研究である。結論を述べる第 3 部を除くと第 1 部と第 2 部から構成されており、第 1 部では総称性を表現する代表的な構文である総称文 (generic sentences) の形成メカニズムを形式意味論的アプローチで体系的に報告した。そして第 2 部では、N1 de N2 という形式を用いて無冠詞名詞句の総称性の分析を行ったほか、定名詞句の弱解釈に関する先行研究の理論を批判的に検討した。 第 1 章は本論文の導入部分であり、総称文と N1 de N2 のふたつを対象とした意味論的分析を行うという本論文の目的を明示した後、議論を展開するにあたって前提となる DP 分析やタイプ変換・強制、意味的編入やイベント意味論などの統語論・意味論の理論を導入した。 第 2 章から第 4 章は本論文の第 1 部にあたり、スペイン語の総称文に生じる意味計算を体系的に記述・報告した。第 2 章では、総称性という通言語的概念がどのように理解されてきかをとりあげつつ、総称文が持つ様々な意味特徴を整理し、主語名詞句が表す存在を承認した後で述定を行う複合判断を行うこと、真偽の判断に関して反例となる存在に寛容であること、特定の時空間に束縛されない非境界・未完結的な特性をもっていることを述べた。さらに、総称性の定義の根幹となっている種 (kind) という事物に対する存在論におけるアプローチを概観した。Carlson (1977a) などに代表される諸研究によれば、事物 (entity) は種 (kind)/対象 (object)/局面 (stage) という 3 種類の在り方を持っている。そのうち、種 (kind) は内包的存在であり、特定の時空間に実体を持つことはないが、対象あるいは局面によって実現 (Realization) や例示 (Instantiation) されることで存在している。種・対象は個体 (individual) と呼ばれる存在体をなすが、個体の存在領域は Link (1983) によって代数的にモデル化することができることが提唱されている。他方、局面は特定の時空間における種あるいは対象の切片であり、特定の時空間における事象を表す述語によって切り分けられることで形成される存在体である。局面が特定の述語によって得られる存在体であることから分かるように、述語もどのレベルの事物に述定されるかによって分類することができ、種に述定される述語を類レベル述語 (KLP)、種・対象に述定される述語を個体レベル述語 (ILP)、局面に述定される述語を局面レベル述語 (SLP) と呼ぶことを述べた。このように、次章以降で展開するスペイン語の総称表現に関する議論の準備を行った。	

第3章では、本研究の対象言語であるスペイン語における総称文に関する知見を整理した。スペイン語は他の多くの言語と同様に総称性だけを一意に表現する手段を持たず、様々な構造を持つ名詞句に対して様々なレベルの述語が述定されることで総称文が形成される。すなわち、スペイン語は様々なパターンの総称文を持っており、主語名詞句は定冠詞単数・定冠詞複数・不定冠詞単数のいずれかの数・定性を選択しうる。本章ではまず、それぞれの名詞句が形成する総称文がどのような特性・制約を持つのかを、主要な研究を参照しながら概観した。過去の知見を整理する中で、定冠詞単数は「緑色の瓶」や「海辺のアパート」のように確立していない種を指すことは難しいものの、単独で種指示が可能な唯一の数・定性であること、定冠詞複数単独で種を指すことはできないものの、総称文を形成するために特段の制約が存在しないこと、不定冠詞単数は対象指示表現であることから類レベル述語と共起してもサブクラスに対する述定しか行えないこと、そして「犬」と「吠える」の間に見られるような本質的關係性が認められる述語とのみ総称文を形成することができるなど、他の数・定性よりも制約が多いことを、いずれも Leonetti (1999) の記述をもとに概括した。

続いて、スペイン語の種指示に関する近年の代表的研究である Borik & Espinal (2015) および Aguilar-Guevara & Zwarts (2014) を批判的に検討した。Borik & Espinal (2015) は定名詞句を主語とした総称文を扱った研究であり、DP/NumP/NP の三層モデルで名詞句の構造を規定している。彼女たちによれば、スペイン語の名詞句 (NP) は種の属性 (property of kinds) を表す表現であり、NP が数素性 Num_[±PL] を主要部とする数句 (NumP) と併合することで種の具体的実現である対象の属性 (property of objects) を表す表現に切り替わる。そして、このような枠組みを用いて「総称文の主語を務める定冠詞単数は [DP D [NumP Num_[-PL] [NP N]]] という三層構造ではなく、NumP を欠いた [DP D [NP N]]

という二層構造である」という主張を行っている。もうひとつの定名詞句である定冠詞複数についても、定冠詞複数の外延は対象の最大和 (maximal sum) であるものの、個体レベル述語と共起することで内包化のタイプ強制が生じ、対象の最大和が種に変換されるプロセスを提唱している。これは、定冠詞単数・複数の総称文が持つ意味的特徴および制約を適切に説明することができる理論であるが、彼女たちの述語の分類に対する態度が一定ではないこと、そして不定名詞句が分析の射程に含まれていないことを問題として指摘した。

続いて検討した Aguilar-Guevara & Zwarts (2014) も、定冠詞単数の種指示に関する意味論的研究であるが、彼らは to read the newspaper における the newspaper のように一見して唯一性条件を満たしていない弱定名詞句 (weak definites) との類似性に着目し、定冠詞単数による総称文の派生メカニズムを提唱している。彼らによれば、総称文の定冠詞単数も弱定名詞句も種指示表現であるが、対象を入力とする述語 (OLP) の項となった場合に種から対象の属性に外

延が強制転換される操作が起こり存在量子に束縛されたものが弱定名詞句、そして不可視の総称演算子 GEN に束縛されたものが総称文の定冠詞単数である。Aguilar-Guevara & Zwarts (2014) の主張も、定冠詞単数が持つ特徴や制約を適切に説明することが可能であるが、本研究とは述語の分類に関する態度が異なること、総称演算子 GEN の挿入に制限を設けていないことを問題として指摘した。

第 4 章では、第 3 章で検討した先行研究を修正・補足する形で、スペイン語における定冠詞単数・定冠詞複数・不定冠詞単数の名詞句が KLP, ILP, SLP と総称文を形成するメカニズムを体系的に記述した。定冠詞単数は、Borik & Espinal (2015) の述べるような DP/NP による 2 層構造を持った種指示表現である。したがって、種を入力とする KLP および種を入力とすることができる ILP は述定可能である一方、SLP と結合する場合は、単純現在時制が供給する習慣演算子 HAB によって SLP が ILP に昇華した後で、種に対する述定が行われると結論付けた。

定冠詞複数についても、Borik & Espinal (2015) が唱えるように KLP/ILP と結合する場合は、KLP/ILP によって名詞句の外延が内包化される操作が生じ、定冠詞複数は特定の世界における対象の最大和を指す表現から世界を指定されない対象の最大和を指す表現に切り替わり、これが種を間接的に指す表現となる。SLP との結合については、定冠詞単数の場合と同様に GEN を想定せず、SLP が習慣演算子 HAB によって ILP に昇華することで定冠詞複数の外延を内包化する操作が起こることで総称文が得られると結論付けた。

最後に、スペイン語を対象とした明示的な言及が存在しない不定冠詞単数については、英語・フランス語の不定名詞句を論じた Dobrovie-Sorin & Bayssade (2012) を参照しながら、GEN を想定する分析を行った。不定冠詞単数は対象の原子的個体の集合を指す表現であり、KLP と組み合わせさせてタイプ強制が起こってもサブクラスの読みしか得られず、種全体に関する総称文は形成しない。ILP および HAB によって SLP から昇華した ILP と組み合わせる場合は、不可視の総称演算子 GEN を想定することで総称文が得られる。ただし、GEN を非顕在的に想定できるかどうかは、主語と述語の本質的關係性に大きく依存しており、ILP と形成する総称文は総じて容認性が低い。このように、GEN を不定冠詞単数の総称文のみに想定することで、Borik & Espinal (2015) が GEN を想定しない定名詞句による総称文との間に容認性の差異が見られることを説明した。以上が、第 1 部の結論である。

第 5 章および第 6 章は本研究の第 2 部にあたり、スペイン語における総称文研究が議論の対象としない無冠詞名詞句の総称性および、第 1 部で登場した弱定名詞句の問題について議論を行うため、N1 de N2 という複合名詞句を対象に議論を展開した。

第 5 章では、無冠詞単数・無冠詞複数の名詞句の統語的分布および意味的特徴を整理したうえで、N1 de N2 における N2 位置に代表される無冠詞で総称性を表現する名詞句に関する分

析が総称性研究のあきまとなっていることを指摘した。その後、N1 de N2 という形式が持ちうる意味論的内部構造について、先行研究が提唱する項構造の有無による分類をとりあげて、各分類を構成するパターンを概括した。最後に、第 1 部で Aguilar-Guevara & Zwarts (2014) が総称文の定冠詞単数を分析するなかで提唱した定名詞句の弱解釈に関する理論についても、N1 de N2 に生じる弱解釈に着目することで明らかになる問題を指摘した。

第 6 章では N1 de N2 が項構造をもつ場合として N1 が動詞派生名詞であるケースを、N1 de N2 が項構造をもたない場合として全体で複合語をなすケースをとりあげて、それぞれのケースにおいて無冠詞 N2 が生起する条件を分析した。N1 が動詞派生名詞などのような非飽和名詞である場合、前置詞 de は項構造を持つ N1 とその項 N2 をつなぐ純粋な文法標識として機能するため意味計算に貢献しない。動詞派生名詞の内項として無冠詞複数で出現する N2 については意味的編入で説明を与えることができるが、くわえて N1 de N2 という形式では動詞から派生した N1 のあらゆる項が N1 よりも低い N2 の位置を占めることから、非能格自動詞の外項相当の N2 であっても一貫して意味的編入を用いた説明が可能であることを主張した。また、無冠詞 N2 は複合語における N2 と酷似したふるまいを見せるため、上記のアプローチが複合語全体に適用可能であることを述べた。

一方、複合語をなす N1 de N2 は、N1 と de N2 の間で類レベルの交差的修飾が行われることで得られる形式である。複合語 N1 de N2 における N1/N2 の間には項構造がなく、前置詞 de は何らかの意味機能を果たしている。本研究はこの前置詞 de の意味を、抽象的關係 REL_{de} を N1/N2 の指示対象の間に導入する 2 項述語であると定義したうえで、無冠詞単数 N2 は類レベルの意味的編入が、無冠詞複数では従来の対象レベルの意味的編入が de によって生じていると解釈することで無冠詞 N2 に対する統一的な説明が可能であることを主張した。

最後に、N1 de N2 を用いて弱解釈の問題を精緻に議論した。Aguilar-Guevara & Zwarts (2014) は弱解釈される定名詞句と結合する述語は OLP ではなく KLP であり、OLP を典型的使用 (Stereotypical Usage) に関する条件を意味に含んだ KLP に昇華する語彙規則を提唱している。しかし、N1 de N2 における N1 の弱解釈には典型的使用に関する意味が含まれていない事例が観察されることを上記主張の反例として提示し、esquina (corner) など語彙的に個別性が低い関係名詞である場合や、la hoja de un cuaderno (the sheet of a notebook) のように修飾語が広い作用域をとる不定表現であるせいで対象 (object) としての個別性が捨象されるといった条件が、先行研究が述べる典型的使用に並んで、OLP と kind を合成させる要因となっており、両者が意味計算部門で合成される際に生じるタイプ強制が弱解釈の根源であると主張した。

最後に、第 7 章のみからなる第 3 部では、本論文の結論および今後の展望を述べた。